

御宿町の昔ばなし
『幸せ貧乏』

むかしむかしのことです。海辺の村に、それはそれは貧乏(びんぼう)なじいさんが、ばあさんとくらしていました。このじいさんには子どもが大勢いました。子どものために、と朝早くから夕方おそくまで海に出て働き、長者の家に魚を納めていました。

ある日、漁の終わった夜のことでした。長者が言いました。「じいさまや、ありがたうございしました。おかげで今日もたくさん魚が獲れた。今夜はお礼に一杯やろうと思う。わしの家に来てくれまいか」とじいさまをよんでごちそうしました。酒が入っていると、長者はおいさまを見ながら、いいました。「じいさまの幸せに、わしもあやかりたいもんだ」それを聞いたじいさんは、ポカーンとしていました。

「わしが幸せだぞ?長者さま!」そ、村一番の幸せ者でございましょう?お金がたくさんあつて...このような立派な家に住んで、美味しいものたらふく食べて...幸せではありませんか?」



長者は、「なにをいう...」じいさまこそ、村一番の幸せ者だ。なんといつてもじいさまは、人間にとつて一番の宝の健康と、二番目の宝である子どもが大勢いるんだから...」

「はあ、このように健康は幸せですが、子どもは多すぎて多すぎて、おかげでお金は右から左へとすくなくなつてしまします...長者さまは...それ、お金をたくさんお持ちで...」
「...そうじゃ、わしは三番目の宝である、お金しか持っていない。健康もすぐれんし、子どもにも恵まれなかつた。そうすると、やっぱり村一番の宝持ち、じいさまだよ...」
「そうですか、それはそれはありますがどうございます」
酒の宴が終わると、じいさまはニコニコしながら急いで家に帰りました。

そうして長者に聞いた三つの幸せについてばあさんに話しました。「わしらが村一番の幸せ者か。鎮守様に健康と子だくさんのお礼に行きましょう」と、その夜に鎮守様に出かけました。翌日、海にたき木ひろいに出かけたおじいさまは、たくさんマキをひろいました。家に帰ってマキをわつたらびっくり。中から大判小判がザクザクと出てきました。おじいさまとおばあさまは、びっくりぎょうてん。じいさまはばあさまにいいました。「わしらは、健康と子だくさんの幸せ者だ。この上、三番目の宝まで手に入れたら、バチが当たつてしまう」とマキの中から出てきた金を村人にあげてしまいました。この時からおじいさまとばあさまは、「幸せ貧乏者」と村のみんなからよばれるようになりましたとき。



編集後記

ガザ地区から安全を求めて避難した人々の惨状が連日テレビで放送されています。平穏な日々の生活をだれもが希求していながら、だれも蛮行を止めることのできない、そして何もしていない自分がいます。解決は世界のリーダーに任せるとして、愛の会17号をお楽しみください。「脳と体をアクティブに保つ5つの習慣」の一、十、百、千、万のまとめは上手です。二兎を追う倍賞千恵子さん、いつまでも若かった日野原重明医師の秘密をお届けします。生き方として見習うことが多そうな縄文時代の話と現代の樹木葬の流行りにつながりがあるのかと思ひながら掲載しました。読後感想をいただければ次回につなげていきます。最後までお読みいただきありがとうございます。編集子

クイズの答え

48分でスイレンがいっぱいになるのなら、湖の半分になるのはその1分前ですよね。24分と答えそうになるひっかけクイズです。



「謹賀新年」



「かまくら」は、毎年2月15・16日の夜に行われる、水神様にお賽銭を上げて、家内安全・商売繁盛・五穀豊穡などを祈願する行事です。横手のかまくらは、約450年の歴史があるといわれています。みちのくの冬の風物詩として全国的に知られています。中に子どもたちが入って、「はいってたんせ(かまくらに入ってください)」「おがんでたんせ(水神様をおがんでください)」といいながら、あまこ(甘酒)やおもちをふるまいます。昭和11年、ドイツの建築家ブルーノ・タウトがかまくらを見てメルヘンの世界を絶賛し、彼の著書「日本美の再発見」にそのときの感動を伝えています。「すばらしい美しさだ。これほど美しいものを、私はかつて見たこともなければまた予期もしていなかった。これは今度の旅行の冠冕だ。この見事なカマクラ、子どもたちのこの雪室は!子どもたちは甘酒を一杯すすめてくれるのである。こんな時には、大人たちはこの子たちに一銭を与えることになっている。ここにも美しい日本がある。」

新年のご挨拶

一般社団法人愛の会
代表理事 最首美枝子



新年あけましておめでとようございませう。令和になり、あつという間に6年目に入りまして。「光陰矢の如し」と言いますが、年齢を重ねるごとに早さが増すように感じます。近ごろ世界では憂慮すべき様々な事が起きていますが、すべての方々に平和と幸せが訪れることを祈るばかりです。皆さまにとりまして今年も良い年になりますよう、一日一日を大事にされ、楽しく笑顔で前向きにまいりましょう。私ども「愛の会」は、これからは皆さまにご満足いただけますよう、ご支援に取り組んで参ります。

懇親会を開催しました

令和5年10月6日(金)、木曾路稲毛穴川店にて第1回懇親会を開催いたしました。会員様同士初めてのお顔合わせということもあり、最初は少々緊張されている面持ちでしたが、時が経つにつれ和やかな雰囲気となり、AIロボットの柴犬「こうた君」、会員様が作詞された詩集の紹介、普段の暮らしやご心配事など、美味しい食事を楽しみながら皆様自由に近況報告して下さり、盛況のうちに終了いたしました。お忙しい中、お越しいただいた皆様には、ここで改めまして御礼申し上げます。今後も交流の場として定期的に懇親会開催を企画いたします。今後とも愛の会をよろしく願い申し上げます。



脳と体もアクティブに保つ5つの習慣



杏林大学医学部名誉教授。臨床循環器学の権威で、専門は心臓病。NHK文化センターでの講演『すこやか健康教室』は20年以上継続。主要著書は専門書と一般書で70冊を超える。

心臓病の名医で、テレビやエッセイでおなじみの石川恭三先生は、87歳の今も講演活動を続けられています。そんな石川先生自らが長年実践されてきた「一読、十笑、百吸、千字、万歩」アクティブな脳と体を支える、健康法を教えてくださいました。

健全な体に健全な精神が宿ると言われます。

それがすべてではないにしても、心理の一面を貫いているのは確かです。体に異常があるときには、日ごろは考えもしないような考えに浸ってしまうこともあるでしょう。「喋って、動いて、考えて、よく寝て、よく食べ、よく笑え」日々、自分に向かってこう号令を掛けています。快活な人生を送るためには欠かせない要素ですが、年齢を重ねるにつれ、だんだん減ってしまいがちだからです。「一読、十笑、百吸、千字、万歩」を意識すれば、それが自然と実行できるでしょう。いきなり全部は無理かもしれませんが、「十笑」がおすすりめです。一人で笑うのは難しいので、だれかとおしゃべりをしに出かけるきっかけになります。よくおしゃべりをした後は、頭の回転が速くなっていると感じるでしょう。おしゃべりをして背筋を伸ばして歩けばいい運動になり、お腹がすくし、よく眠れ、免疫力もアップしますよ。



クイズ 湖のスイレン



「湖のスイレン」は、ひっかけ問題として有名なクイズです。問題文をそのまま考えてしまうと正しい答えにたどり着くことはできませんよ。直感ではなく、問題文をよく理解して考えてみましょう。冷静に考えれば簡単に解けるひっかけ問題です。

- 湖にスイレンがあります。
- スイレンの花は、1分ごとに2倍に増えていきます。
- 湖がスイレンでいっぱいになるのには、48分かかります。
- では、スイレンの花が湖の半分になるのには何分かかりますか。

答えはこの号のどこにあるよ！探してみてね!!



おひとり様でも不安なく笑顔で暮らせるお手伝いをしたい。愛の会はそんな思いから生まれました。

「身元保証」「生活支援」「金銭預託管理支援」「公正証書遺言作成」「成年後見人支援」「葬送支援」「死後事務支援」「遺品整理」

一般社団法人 **043-287-1975**

愛の会 <https://meguminokai.or.jp/>

〒260-0045 千葉市中央区弁天1-15-1細川ビル4階



二兎を追う

賠償千恵子



女優の倍賞千恵子さんは東京の下町で生まれ育ち、のど自慢出場を機にみずす児童合唱団、松竹音楽舞踊学校、松竹歌劇団(SKD)へと進み、歌やダンスの技を磨きます。松竹にスカウトされ、一九六一年に銀幕デビュー。持ち前の明るさと親しみやすさから庶民派女優として国民的スターに飛躍しました。「下町の太陽」「さよならはダンスの後に」などヒット曲を歌いつつ、女優として「男はつらいよ」シリーズや「家族」など人気映画にも出演。「幸福の黄色いハンカチ」「遙かなる山の呼び声」などで女優、高倉健さんと共演しました。

思いがけない「事件」が起きたのは今年五月二五日昼。旅行仲間と松山道後温泉に出かけた時のこと。松山空港の通路をスキップしながら歩いていたら、絨毯に足を取られて転んでしまったのだ。

(あつイタタ)

激しくぶつけた右脚全体に鋭い痛みが走り、すぐには起き上がれない。慌てて後方から駆け寄ってきた作曲家で夫の小六さん(小六禮次郎)が私の顔を心配そうに覗き込んでいる。「おい、大丈夫かい?」「なんか捻挫したっぽい。アキレス腱も痛めたかも」

大事を取り、小六さんや仲間たちと空港からタクシーで現地の病院に急ぐ。すぐに精密検査を受けると医師から思わぬ言葉を告げられた。「大腿骨折ですね。付け根の関節が壊れています。すぐ手術しないとダメですよ」

「え? 手術ですか……」

目の前が真っ暗になった。実は一カ月後の六月二五日に東京でコンサートを予定していたから最低でも一カ月は入院しないとダメだ。困ったようにため息をつく小六さんの顔を見ながら私は即座に覚悟を決めた。

(よし、東京に戻る。手術してリハビリに取り組み、復活してみせるわ。コンサートは絶対に中止したくない)

夕方便に空席があったので仲間たちと別れ、小六さんと羽田にとんぼ返り。かかりつけの主治医に事情を説明し、こちらの意向を伝えると、無理難題にもかかわらず「分かりました。ベストを尽くしましょう」と約束してくれた。

それからは奇跡の連続だった。翌日昼までに人工関節を埋め込む手術を終え、翌々日から歩行訓練を開始。朝昼晩とマッサージや発声練習も取り混ぜたりハビリにひたすら取り組み、なんと術後二二日で退院。予定通りコンサートを終えることができたのだ。

「驚異的な回復力」などとおだてられるが、私は周囲があきれられるほど前向きで楽観的な人間であるらしい。「ファンの方々が待っているから、その期待を裏切っちゃいけないよ。亡き母に言われ続けた言葉が頭のどこかに染み付いているのかもしれない」

「二兎を追うものは一兎をも得ず」という諺とは裏腹に私は「歌」と「映画」を追いかけた。この二兎を通じて素晴らしい人々と出会い、触れ合い、そして楽しく仕事してきたからこそ今の自分があると深く感謝している。

昨年末、「男はつらいよ」で寅さんの弟分、源公役で共演してきた佐藤

蛾次郎さんが急逝した。「寅さん」関係者は私にとって家族同然の大切な人たち。渥美清さんをはじめ多くが天国にすでに旅立ってしまった。家族が少なくなるのは本当に寂しいこと。

「お〜い、生きてるかい」「うん、何とか元気だよ」

蛾次郎さんと電話で交わしたこんな会話が懐かしい。死ぬって何なんだろう? 何年前か前、答えが知りたくて知り合いの住職に質問してみたことがある。すると「死ぬとは、即ち生きることです」と言われてハツとした。

(そうか。死ぬとは、死ぬまで生きることなんだ。死があるからこそ生がある。生と死は密接につながっている……)

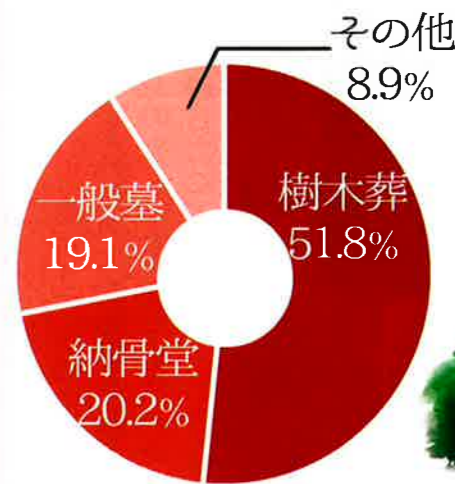
「ならば最期まで精いっぱい生きればいいじゃない。そう考えたら肩の力がスッと抜け、何だか穏やかな気持ちになった」

現在八二歳。今から、ここから。こんな言葉を心に刻みながら等身大の人生を元気に楽しく歩みたいと思う。



樹木葬が人気のようですが…

墓地の消費割合



社会的ニーズが高まる「墓じまい」に際して選択肢の一つとして樹木葬が人気のようです。

二〇二三年のお墓の消費者全国実態調査の結果では、樹木葬が五二・八%（平均価格は六六九、〇〇〇円）、一番目に多いのが納骨堂で二〇・二%、一般墓は一九・二%、その他八・九%となっています。新たに墓を買う人の半数が樹木葬を選ぶと言う時代になりました。

しかし三〇万円のはずが二百万円になったとか、管理ができていなくて荒れ放題になっている等の後悔の声も聞かれます。どんな問題があるかを纏めましたので、ご参考になさってください。



～樹木葬で後悔しないためのチェックポイント～

タイプ	チェックポイント	確認、手配しておく内容	チェックが必要理由(怠った場合のリスク)
共通	家族や親族と合意をとれているか	樹木葬にしたことについて、あとで親族から苦情がでないか	遺骨を骨壺に入れずに土に埋めることに抵抗感ある人も多い
	宗教や宗派を問わないか	・寺の宗教や宗派の信者のみか ・檀家ごとになることが必須か	入檀させられ、檀家料を取られるケースがある
	どのような埋葬方法か	・骨壺ごとか、遺骨をそのままか ・個別型なのか、集合型なのか	後から遺骨を取り出して改装できないことがトラブルになり得る。
	墓苑の募集区画に余裕があるか	樹木葬墓ばかりの墓苑も多くあり多くの区画が埋まっていないか	値段が高い区画や必要以上に大きい敷地を勧められる可能性がある
	費用は納得できるか	・不要なオプションや高い管理費などかからないか	一般的な墓と変わらない水準の費用がかかることもある
	ペットが入れるタイプか	・ペットの遺骨と一緒に入れるタイプか、そうでないか	犬猫嫌いの人だと、合祀の際に親族から異論が出ることがある
里山型	運営側の経営状態は良好か	・施設の継承者はいるのか、破綻するリスクはどうか	経営破綻をすると手入れが全くされなくなる可能性がある
	山奥でアクセスが不便ではないか	・景観を優先して不便すぎる墓苑ではないか ・駅からのアクセスはどうか	親族も友人もお参りから足が遠のくようになる
都市型(寺院・霊園)	墓苑を周囲の土地が手入れされているか	・墓苑の山の管理体制はどうか ・野生動物が出没したりしないか	埋葬された場所がわからなくなる
	契約期限はいつまでか	・合祀されるまでの契約期限 ・期限後に延長できるか ※最低でも13年以上の契約が望ましい	5年や7年で合祀されるタイプもあり、改装やお参りがしにくくなる
	子どもや孫は継ぐ墓がなくてもいいのか	契約期間が切れると墓の使用ができなくなり、実家の墓はなくなる。本当にそれでいいのか	子どもたちが同じ墓地に入れなくて後悔する可能性がある

いちどく 一読

一日に一回まとまった文章を読もう

文章を読むと、左右両側の脳の多くの場所、特に最も高度な精神活動をつかさどる前頭前野が活発になります。さらに音読は、黙読より多くの脳の部位が活動するので、できれば声に出して読んでみてください。

日常を何となく過ごしていると、テレビやインターネットで情報を「見る」とはあっても、「読む」ことをしなくなりがちです。これでは脳の表面で情報が回るだけで奥深くまで刺激が到達しません。一日一回はまとまった文章を読んで、脳を動かしましょう。

じゅっしょう 十笑

一日に十回くらい笑おう

できれば、くすくす笑いだけではなく声を出して笑いましょう。お笑い番組を見て、大笑いするのも良いですね。笑うことで気分が爽快になって、免疫力が高まります。しかも、よく笑う人のまわりには人が集まってくるので、コミュニケーションが活発になり、脳が活性化されるといっておまけ付きです。

年齢を重ねると大きな声で笑うことが少なくなりますが、「笑う門には福来る」嫌なこと、つらいことは笑い飛ばしてしまいましょう。

笑いは、意思や理性をつかさどる大脳新皮質の血流を促進して脳を活性化させ、アルファ波を増やして脳をリラックス状態に導きます。さらに記憶や学習をつかさどる海馬が活性化され記憶力もUP!



音読は、声を発し、その声を聴くことも加わるため、実に大脳の70%以上の神経細胞が動くという研究も!

ひゃっきゅう 百吸

一日に百回くらい深呼吸をしよう

一度に十回ずつ、一日にトータルで百回くらい深呼吸をしましょう。人は緊張しているときや心配事があるときには、呼吸が浅くなってしまいます。腹式呼吸でゆっくり息を吐くと、副交感神経の活動が優位になり精神的な安定感が得られ、同時に脈拍が遅くなり、血圧は下がり、筋肉の緊張が緩みます。また、深呼吸は普通の呼吸では目を閉じてつぶれていた肺の下方を押し広げて、酸素の取り込みの効率を高めるので、頭がすっきりしますよ。

せんじ 千字

一日に千字くらい文字を書こう

文章を書くことは、認知機能を高めるうえで極めて有効です。とはいえいきなり毎日千字を書くのは難しいと感じるかもしれませんし、何を書けばいいのかわからないという人もいます。昨日の食事内容を書くのもいいし、昨日の食事内容を書くのもおすすめです。ポイントは、今日ではなくて昨日の食事を思い出して書くこと。なるべく漢字で書くことより効果的です。料理の感想などを書きとめれば、千字くらいはすぐ。ムリなく続けられますよ。



頭がぼーっとするときは、浅い呼吸のせいで脳が酸欠状態かもしれません。脳への酸素供給は、口呼吸より鼻呼吸の方が効率的という研究も。鼻でゆっくり深呼吸してみましょう。

まんぼ 万歩

一日に一万歩を目指して歩こう

ウォーキングは、比較的簡単な有酸素運動です。体力向上とともに、生活習慣予防になり、脳も活性化されます。特に楽しみながら行うと、ドーパミン系の神経が活性化され、前頭葉の働きが高まります。大脳生理学が専門の友人は、好きな音楽を聴きながら歩いています。最初はムリのない距離から始め、徐々に歩く時間を長くしていき、慣れたら速度を速める、起伏のある道を歩くなど、少しずつ負荷を上げていくと良いでしょう。

ウォーキングを続ける脳神経が海馬の神経が増え、思考力や学習力などにかかわる前頭葉や、記憶力などにかかわる側頭葉のポリニューロンが増えることが研究で確かめられています。



人は「創める」ことさえ 忘れなければ、いつまでも若い

日野原重明

私は一九七〇年、五八歳の時によど号ハイジャック事件の現場に居合わせました。北朝鮮へ向かう途中、赤軍の若者たちは、「機内に本をいくつか持ち込んでいようから、読みたい者は手を挙げよ」と言いました。その中にドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』がありました。乗客は誰一人として手を挙げませんでした。乗客は誰一人だけが『カラマーゾフの兄弟』を貸してください」と手を挙げました。開いてみると、冒頭に聖書の教えの一部が出ていました。「一粒の麦、もし地に落ちて死なずば、ただ一つにてあらん、死なば多くの実を結ぶべし。」私もここで一つの麦となって死んでしまふかもしれない。けれども私のこれからの振る舞いが、後に続く人たちに何かの結果を及ぼすかもしれない。そういう気持ちを持って心を静かにし、皆のためにできるだけのことをしてやろうと考えたんです。

私たち乗客は事件から四日目に全員無事、韓国の金浦空港で解放されることになりました。靴底で台地を踏んでその上の音を聞いた時「無事地上に生還した」と感じました。そして「あ、これからの私の人生は与えられたものなんだ」と思いました。帰国すると千人を超える皆さんから見舞いやお花が届いていました。私たち夫婦は皆さんに感謝の意を表し、礼状を出すことにしたんですが、妻は私の文章の後に続き、こんな言葉を添えました。「いつの日か、いずこの場所かであなたがこの受けました大きなお恵みの一部でもお返しできればと願っております」

妻は無口で出しゃばらず、いつも控えめな女性でしたが、この言葉は私を驚かせ、妻に尊敬の念を覚えさせました。そしてこの言葉が私の第二の人生の指針となりました。その後しばらくしてマルティン・グーバーと言う哲学者の本を読んでいた時に、「人は創(はじ)めることさえ忘れなければ、いつでも若い」という言葉に出会いました。そう、今までやったことのないことをやってみよう。その四年後私はライフ・プランニングセンターを創設して予防医学の重要性などを訴え、八九歳の時に「新老人の会」を立ち上げ、七五歳以上の新しい生き方を提唱してきました。その会に掲げた「愛し愛されること、創(はじ)めること、耐えること」と言う三つのモットーは、それまでの私の人生体験を踏まえて作られたものなんです。つまりあんなに事件に遭遇したことが、私に本当の生きの意味というものを教えてくれたんです。



日野原重明 (ひのはらしげあき)
元聖路加国際病院理事長
1911～2017年 105歳で没

縄文の社会と死生観

約1万年前<400世代前>の私たちの先祖が生活した前縄文時代の社会はどういう仕組みになっていたのでしょうか。絶対的なリーダーは置かず、得意・不得意に応じた役割分担をし、労働時間は1日4時間・・・と聞くと、現代の私たちから見れば、理想的な社会だと思います。先祖の霊を大事にし、魂の再生を信じていたと言う精神的な拠り所について、縄文研究者の岡村道雄さんにお話を聞いてみましょう。

一日四時間の労働で幸せに暮らせた

縄文の人々の働き方はどのようなものだったのでしょうか。男性は狩りをして、鹿や猪などの野生動物の捕獲や魚取り、女性は貝を集めたり粘土をこねて土器を、またザル・籠や衣類作りをしていました。そしてその労働時間を推測してみると、一日四時間程度となり、女性はもう少し短かったようですが、それでも十分楽に暮らしていたのです。さらに縄文人には誰かのために働くと言う意識はなく、役割分担も上下関係でもなく、得意・不得意に応じたものと推測されます。また、縄文女性は、粘土で土偶を作って、安産や長寿、家族の安寧といった願いを込めたと思います。家を守っていたのでしよう。

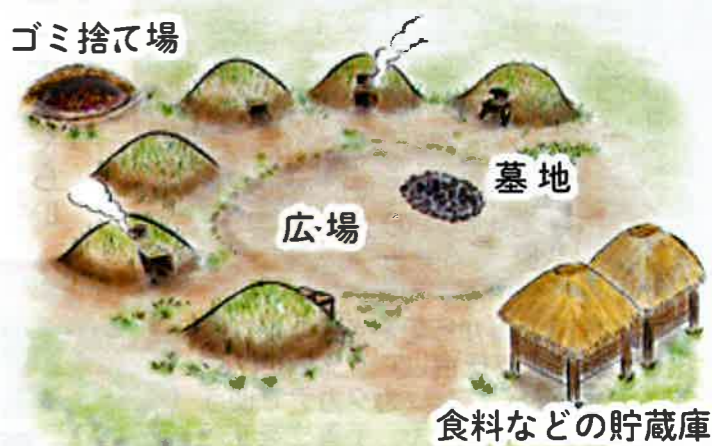
土地を所有しない上下関係もない社会

縄文時代の竪穴住居は、定住施設の一つではありますが、そのじつ住む人は流動的だったようです。例えば、集落に子供を産める若い女性が極端に減ってくると、他の集団に集団移動して、年齢、性別のバランスを整えます。このことは、集落の墓場に葬られた人々の歯形に明らかに血統が違う一集団と推定される歯形の違う一集団が混じっている場合があるのでもわかります。

このように気軽に場所を移動できるのは、個人で土地を所有すると言う価値観が全くなかったのも一因でしょう。動物も植物も人間も全て自然の一員で、食べ物は神様からいただいたものと考え、いたので、独り占めするような事はありません。

男性同士の間にも上下関係はなく狩りをする時や、会議や交渉の場では、先頭に立つのが得意な人がリーダー的な役割をしても、絶対的なリーダーはいませんでした。埋葬されていた人物の副葬品から、例えば弓矢があれば、狩りリーダー、マダイの頭や亀の甲羅で作った装身具があれば、漁の名手だと推測できます。だからと言って固定した階級など存在をしなかったと思います。その理由として、**集団の中に特別な場所を占有したりする立派な住居跡がないこと、墓はどれもほとんど差のない土坑墓であったこと**などが挙げられます。

一方、言葉が巧みな女性は、集落の人々を精神的にまとめていました。これらは、後に神がかり的な言葉で、部族に君臨した邪馬台国卑弥呼のルーツとも考えられます。



中心に墓地を置き、住居は円形に配置

では集落の形はどうだったのかと言うと、真ん中に広場があり、その中心には墓地が置かれ、広場を囲むようにして竪穴住居が配置されていると言うのが通常のケースです。墓地を中心にして、尊敬すべき祖先の霊に守られながら、暮らしを営む。結果的に住居は墓地の周りにおかれ、全体的に見ると環状のムラになるわけです。つまり、住民がみな、中心から等距離にある状態を作り出していました。

それぞれ得意なことをやるけれど、地位が固定されているわけではない。みんなお互いの能力を認め合いながら、特定の人が蓄財したり、絶対的な権力を持たないようになっているのです。縄文時代が上下関係のない社会だと言う事は、こうしたムラの形からもわかります。

そんな争いのない社会が終わりを迎えるのは、弥生時代に米作りが始まって、その後生産性が高くなると、米を権力者に収めるようになってからです。食べ物やシエアすることをやめ、余剰分が個人の財産になると競争社会が始まります。競争に勝ったものが権力者となり、やがて国ができ、人々は国と国の争いに込まれていくのです。

魂は再生すると言う死生観

そもそもムラをどこに作るかと考える時、「近くに帰るべき山がある」ことが一つの条件でした。今でも神が宿るとして信仰の対象になっている山が各地にあります。縄文の人々は「死んだら山に帰って生まれ変わる」と言う再生を信じていたようです。

死者は神になって自然の中に旅立つけれど、また循環して自分たちのもとに帰ってくるのだと言う。それが後に仏教で言う「輪廻転生」の理念につながっていくのでしようが、**肉体がなくなっても魂は残り再びこの世に生まれくる**と言う考えは、**縄文初期の頃から存在したようです**。人は自然の一部として、他の神々と共に日々神に守られて暮らす。墓地を生活の中心に置くのも、こうした循環や再生を願う祭祀的な生活が日常生活ものだったからです。また、縄文人は、一人ひとりの尊厳が大切にされ、丁寧に葬られました。墓の数が竪穴住居の数に比べて、大変少ないことから、埋められなかった人々がいたのではないかと推測されています。

古代・中世の文献には「置く棄つ」と言って野山に遺体や骨を捨て、祭祀をしていた絵図もあります。肉と魂は別物だと考えたのでしよう。屍は捨ておいても、魂は山に帰り、また生まれ変わるのだと。最後にどうやって死んでいくのかは現在にとっても悩ましい問題です。縄文時代にはさかのぼって、人間本来の暮らしや魂の在り方を考察してみれば、そこに現代にも通じる死に方、そして生き方のヒントが隠されていると思います。



岡村 道雄

(おかむら・みちお)さん。考古学者。1948年生まれ。東北大学文学部卒業、同大学大学院修了。東北大学、東北歴史資料館、文化庁、奈良文化財研究所などで勤務。専門は日本の旧石器時代から縄文時代、埋蔵文化財保護。主な著書に『縄文の生活誌』『縄文物語 海辺のムラから』『貝塚と骨角器』『縄文人からの伝言』『やってみよう縄文人生活』などがある

